

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第780号 平成26年8月4日

### 驚くという事

今年の4月に行われた卓球のワールドツアー、ドイツ・オープンの女子ダブルスにおいて、平野美宇、伊藤美誠という二人の卓球少女（13歳）が史上最年少で優勝しましたが、その優勝で5000ドルの優勝賞金をもらえると知った二人の驚きの写真が国際卓球連盟の提供で世界中に配信され、表情の可愛らしさが評判を呼びました。



左の写真が、優勝賞金をもらえると知って驚いた時の二人の表情ですが、考えてみると、私には久しく、こんなにも素直に驚いた事はないなと感じています。

お茶の水女子大学名誉教授で哲学者の土屋賢二氏は、5月29日号の週刊文春で、2人の驚きの表情を見て次の様に述べています。

「人間は自分が生まれてきた世界がどうなっているのかを手探りし、大まかな世界観を抱いている。それを超える出来事が彼女たちに起こったのだ。驚くたびに世界観が更新され、人間は成長する。成長すると、わたしのように驚かなくなり、物事に動じなくなる。」

もしも、驚かなくなる事が成長の証だとすれば寂しい気持ちもしますが、でも、実際に驚きを感じる機会が少なくなって来た事は確かだと感じています。

「驚」という字は、「敏感な馬が、はっと緊張する状態」という事だそうです。

世の中を見渡せば、天変地異、事件事故が絶えず起こっていますから、本当はもっと驚かなきゃいけない事が沢山あるはずなので、驚く事が少なくなったのを、「物事に動じなくなった」と自慢するのではなく、錆び付き始めた感性の方を疑うべきかも知れません。

土屋氏は、物事に動じなくなったのは「もしかしたら世界観が更新され、精緻になった結果、不動心より、軽率さが身に付いたのかも知れない」と述べています。

驚く度に、それまで見えていた世界と違う世界が見えるようになるという事は確かにあり、私達は、多分そのようにして成長して来たのだらうと思います。ところが、どんどん新しい世界観を積み重ねて行く内に、今見える世界が全てだと感じて驚かなくなってしまう、土屋氏がいう「軽率さ」とは、そういう思い込みを指しているのではないのでしょうか。

人は驚きを感じている限り、成長し続けているのだと思います。驚きを感じるか否かは年齢ではありません。「世の中はこんなものだ」と固定的にしかものを見ようとしなければ、どんなに優れたルーペを持ち出しても驚きに出会う事もなければ、見つける事も出来ないでしょう。

幼い子どものような素直な目、柔軟な心、それらを持ち続ける事が出来れば、きっとこれまで積み重ねて来た世界観の上に、更に新しい驚きのページを付け加える事が出来るに違いありません。

とはいえ、子どものような素直な目、柔軟な心を大人になってもなお保ち続ける事は至難の業だと、改めて実感する日々です。（塾頭：吉田 洋一）